

Title	コメント2 : 『希望 (エスポワール)』 『われらの詩』 と山代巴 : 戦後イタリアの文化状況との比較を念頭に
Author(s)	コマストリ, キアラ
Citation	日本学報. 2014, 33, p. 133-138
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/27059
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

コメント2：^{エスポワール}『希望』『われらの詩』と山代巴 ——戦後イタリアの文化状況との比較を念頭に——

キアラ・コマストリ

1. 鳥羽報告・川口報告をめぐって

お二人の報告者は、グローバル冷戦と文化というテーマでおもに広島において創刊された雑誌^{エスポワール}『希望』と『われらの詩』を中心に冷戦下における文化運動の流れについて議論されたと思いますが、非常に興味深い内容でした。

鳥羽さんのお話の前半では、『希望』と『われらの詩』の比較がなされ、類似点と相違点が指摘されました。特に、「原爆／被爆」について、2つの雑誌の共通テーマでありながら、その表象の仕方において違いがあると指摘されました。それは、もともと2つの雑誌の志向が異なっていたからであって、『希望』は、政治的な内容から洗練された“純粹”な文化運動を目指していたのに対して、『われらの詩』は、共産党と密接な関係にあり、政治的な問題への関心が深かったため、文化運動と社会運動がほぼ区別されずに重なり合うという特徴をもっていたからだということが挙げられました。『われらの詩』は、詩とは無縁であるような人に、詩の言葉を通じて感情や経験を表現できる場をあたえようというスタンスの上に立ち、特に被爆体験においては、原爆や戦争の残酷さが強調され、「記録」と「訴え」の姿勢が強く感じられます。それに対して『希望』は、どちらかといいますと過去を振り返るのではなく、その貴重な経験をふまえて前へ進むという、未来へのまなざしの側面が重視されるという印象でした。

鳥羽さんは『希望』における原爆体験について「イニシエーション」という言葉を用いられましたが、私はまた「カタルシス」という言葉を提案してみたいと思います。原爆ですべてがリセットされ、ある意味で「人類のカタルシス」のようなものがなされたなかで、前向きな視線で『希望』をもってリスタートするというのが『希望』の立場なのではないかと思いました。また、雑誌のタイトルについてですが、フランス語の^{エスポワール}『希望』が選ばれたのは、アンドレ・マルローの有名な小説「L'Espoir」から来ているようですが、さらにパンドラの箱の底に唯一残っていた「希望」との関係もあるようです。外国語が用いられたこと、またギリシャ神話からの引用がなされたことも、非常に特徴的だと思います。当時の知識青年にとって、「エスポワール」というフランス語の語彙を用いたり、ギリシャ

コメント2：『希望』^{エスボワール}『われらの詩』と山代巴（キアラ・コマストリ）

神話を参照したりすることには、どういう意味があったのか、彼らなりの普遍性への欲求のようなものがあつたのか、鳥羽さんにご教示いただければと思います。

それぞれ1948年と1949年に創刊された『希望』と『われらの詩』ですが、実際1949年以降、朝鮮戦争の危機が高まるにつれて市民が戦争反対の組織された活動へとたちあがっていく様子が見えてきます。49年8月6日に平和婦人大会が開かれたり、10月2日には平和擁護広島県大会が開催されたりしました。平和擁護大会について川口さんが言及された点でもあるのですが、山代巴も、「参加者は女性が多く、特に中年の朝鮮人が多かった」という点にやはり注目しています。川口さんが指摘された通り、「朝鮮戦争」というコンテキストを抜きにしては、また本日のセッションのタイトルにもあるように、東アジアの諸状況をも視野に入れないかぎり、「被爆地」広島を論じることは困難だと思います。「原爆詩人」と言われる峠三吉を「朝鮮戦争詩人」と読み替えてもいっくらい朝鮮戦争こそが原爆体験の表現化を強く促したのだという川口さんの論点は、非常に重要だと思います。朝鮮戦争がなかったらおそらく『原爆詩集』は今あるようなものとしては存在しなかった、と川口さんはおっしゃいましたが、ではそうだとしたら、当時ようやく出版され始めた広島や長崎の原爆体験記のような記録的なものや、他の「原爆文学」作品についても同じことが言えるのだろうか、のちの作品と対照した場合に朝鮮戦争期の作品にはやはり特徴があるのだろうか、と疑問に思いました。そのあたりをもう少しご説明いただけたらうれしく思います。

2. 山代巴との関わりから

私が研究対象としている山代巴は、『希望』や『われらの詩』の周辺にいて、実際『われらの詩』には執筆もしており、特に峠三吉との交流が多かった人物です。山代巴と峠三吉が初めて出会ったのは、1946年初頭、「広島青年文化連盟」というおもに広島大学の学生たちを中心にした民主的な文化サークルの最初の講演会のときです。当時峠三吉は、その委員長をつとめていましたが、共産党員で党の機関誌『ひろしま民報』『平和戦線』の編集を担当した大村英幸や、原爆体験作文集『原爆の子』の実現に不可欠な役割を果たした荒神小学校教諭の中本剛も連盟の中心的なメンバーでした。「広島青年文化連盟」の仕事は、プレスコードのもとにあつて戦争と原爆の経験が忘却の底に埋もれてしまわないように、その記憶をとどめておくこと、書き残しておくことに重点を置いていました。このサークルの中で峠三吉は指導的な役割を果たしており、学生たちは彼に方法論を学びつつ様々な文芸活動を行っていました。山代巴にとって「広島青年文化連盟」との出会いが、被爆者支援活動にかかわる大きなきっかけとなりました。

とても興味深いことですが、山代巴は「広島青年文化連盟」の講演会でギリシャ神話の

コメント2：『^{エスボワール}希望』『われらの詩』と山代巴（キアラ・コマストリ）

話をし、あのパンドラの箱の物語、『希望』のタイトルとも関わると言ってよいパンドラの箱の物語を題材として取り上げています。好奇心に負けてしまったパンドラは、決して開けてはいけないと言われていた箱のふたを、ある日開けてしまいます。すると、そこから様々な災いが飛び出しますが、パンドラがすぐにふたを閉じたため、希望だけが残されたという物語です。この神話をめぐっては様々な解釈があり、特に最後に残った希望をどう理解すべきかについてはたくさんの説がありますが、山代巴は、この神話を取り上げることで、希望だけはまだ残っている、というメッセージを伝えようとしたようです。戦争、また原爆によってたくさんのものが失われてしまい、たくさんの命も奪われてしまいました。山代巴が、その日に荒神小学校に集っていた人たちに届けたのは、この絶望の中からもう一度立ち上がるのだ、諦めてはいけないのだという励ましの言葉です。原爆という地獄を生き延びた命は、パンドラの箱に唯一残った希望、新たな未来への希望と捉えることができるでしょう。ここには、『^{エスボワール}希望』の「希望」に非常に近い意味合いが含まれていたと考えられるのです。私はこの点にはもっと注目してもよいのではないかと思います。

山代巴の戦後は、党・占領軍・故郷のいずれからも歓迎されない形で始まりました。そこで彼女を支えたのは、まさに人との「出会い」だったと思います。この「広島青年文化連盟」の集まりで出会った人々は、のちの被爆者支援活動の重要な仲間となり、彼らとの交流は運動家の山代巴に深く影響を及ぼしたと考えられます。さらにこの講演会は、広島をめぐる諸問題だけではなく、日本人としてこれからどのように生きていき、新しい日本をどうしていくのかという、さまざまな課題を考えていく一つの大きなきっかけとなったでしょう。

峠三吉と同様、山代巴も1949年に新日本文学会広島支部に入会します。その頃広島支部は、被爆者の組織化と、被爆者の実態と平和への願いを詩集や手記にして出すことに取り組んでいましたが、会の初めての仕事は小中学生を中心にした詩集『原子雲の下より』の編纂でした。そのため「原爆の詩編纂委員会」が結成され、子供による詩や作文が1400編近く集められ、1952年の9月に『原爆雲の下より』が青木書店から出版されます。その過程で「原爆被害者の会」も結成され、続いて当時広島大学の学生であった川手健らとともに『原爆に生きて』の刊行に向けて、被爆者の手記を集める作業が始まります。山代巴は被爆者手記編纂の責任者として、手記を書く人を探したり、聞き書きをしたりするなどの仕事をしていました。「原爆被害者の会」は戦後初めての被爆者の会であって、「新聞やラジオの募集には、あまり頼らず、……被害者の家を直接訪問してお願いし、書けない人々のは代筆してもいい、発表の機会に恵まれない人々の、手記を書かれることに重点をお」いた点に特徴があって（『原爆に生きて』序文参照）、当時先駆的で画期的なやり方でした。原爆被害者は、初めて自分の経験を文章にすることで、自分の思いを確かめるこ

コメント2：『希望』^{エスボワール}『われらの詩』と山代巴（キアラ・コマストリ）

とができ、次第に自分の訴えに自信を持つようになっていきました。この点において『原爆に生きて』は『われらの詩』に非常に近い性格を持っていると思います。両者は、被爆者、あるいはいわゆる「弱者」の主体性を呼び覚まそうとするその姿勢において、共通性を持っていると考えられるのです。もちろん、被爆者の証言を本人の意志に従って書くということには、いくつか問題点があります。例えば、直接耳にした強い訴えが弱いものになってしまうといった点です。あるいは、鳥羽さんが指摘された、『希望』と『われらの詩』に共通する「広島の人々は原爆を語ることに拘束されるべきかどうか」という問題もあると思います。しかし山代巴たちの聞き取りは、被爆者をまず一人の人間として尊重し、本人の状況を考えて都合の悪いところは必ず書き直すという前提で行われていました。書き手の意に沿わない言葉はいっさい用いない、沈黙をあせらずにゆっくりと破っていくという方法が、のちの山代巴の農村での文化サークルや彼女がかかわった様々な活動に大きな影響を及ぼし、1965年に出版されたルポルタージュ『この世界の片隅で』にもその方法が受け継がれていきます。

このように「原爆被害者の会」の活動が進み、その成果が原爆禁止の様々な運動に拍車をかけ、被爆からの20年の歴史を明らかにしようという「広島研究会」の結成にもつながっていきました。ところで、この広島研究会の会の最初の成果である『この世界の片隅で』所収の山代巴「ひとつの母子像」に登場する被爆者の女性「立田松枝」は、じつは『原爆に生きて』に手記を残している「多田マキ子」と同じ人物です。『原爆に生きて』が出た1953年の日本と、『この世界の片隅で』が編集された1960年代前半の日本とは、政治的・社会的な状況がいうまでもなく大きく異なっています。「ひとつの母子像」で山代巴は、次第に変化しつつある被爆者に対する日本社会の態度を分析し、被爆者が商品化されていくさまを明らかにし、原爆を“売り物にする”日本と海外のマスコミをきびしく批判しています。さらに、個人や団体の名誉や利益のために原水爆禁止運動などを利用しようとする人々の出現、被爆者組織の分裂の問題などについても述べています。一方このルポルタージュの後半には、12年間にわたって闘いの生活を送ってきた多田マキ子の新しい証言が収められてもいます。彼女の言葉は、『原爆に生きて』の手記にはみられなかった勢いと大きな力を持っています。その力というのは、今まで語ることができなかった真実をとうとう打ち明けられる、自分が堪えてきた差別や侮辱をやっと世界に訴えられる、その回復された表現の自由にあると考えられます。

多田マキ子は、記憶を振り返りながら、当時の権力者のKによって受けた虐待や、後に自分が被爆者であることを利用されたこと、一人の人間としての尊厳まで奪われてしまいそうになったことを淡々と語っています。彼女は耐えに耐えて我慢し、苦しい思いをしながらも、決してあきらめることはなかった。「戦争の爪を抜こうと思うたら、先ずKのよ

コメント2：『希望』^{エスポワール}『われらの詩』と山代巴（キアラ・コマストリ）

うな悪者から退治して、市民みんなに悪者退治の力をつけて行って、大勢の力で、市も県も平和のためには、ごまかしばかりしていることを、突いていけばいい」という彼女の言葉には、山代巴も心を打たれたことと思います。おそらく山代巴は、多田マキ子の闘いと苦勞の人生の中に、自分自身の苦しみを見だし、その経験から勇気をつけられたでしょう。山代巴が多田マキ子の訴えを代表的な声として読者に届けたのは、そのためだったのではないかと思います。

山代巴は、原爆被害者の会の運動を担い『原爆に生きて』をまとめるなかで、その後の彼女を規定していくことになる重要な問題と出会い、のちには『この世界の片隅で』がまとめられることとなります。では、『希望』や『われらの詩』に関わった人々の場合はどうだったのでしょうか。山代巴のように朝鮮戦争期に見出した問題にその後も一貫して取り組んでいくというようなことがあったかどうか、鳥羽さんまた川口さんにお尋ねしたいと思います。

3. イタリア・ネオレアリズモ映画との対比から

さて最後に、少しイタリアの戦後の状況に触れておきたいと思います。1920年代から40年代にかけて、イタリアの民衆はファシズムから反ファシズムへと、激しい理想の変革を遂げました。もちろん、すぐれた理想家や知識人が果たした指導的な役割が重要なことは言うまでもありませんが、それに劣らず重要なのは、民衆が彼ら自身の生活の中で、結果的に理想の変革を果たしたという事実です。イタリアの民衆は膨大な犠牲を払いながら解放を勝ち取りました。そしてそのなかで、1930年代から1950年代半ばにかけて、ファシズム文化への抵抗として、後述するネオレアリズモをその一環とするような、新たな文化が生まれてきました。しかしながら、イタリアの経済が奇跡的な復興を遂げ、新しい資本主義社会へと変貌していき、レジスタンス運動のイデオロギーが次第に風化していくにつれて、レジスタンスの経験を土台にしていたネオレアリズモも次第に退潮していきます。その後、文学をはじめイタリアの文化運動はますます実験主義的なレアリズモ、のちに幻想的な方向や新前衛派などへ展開していきます。

イタリアと日本の戦後の状況を比較する時、相違点もたくさんあるものの、共通点もいくつか確認できます。イタリアと日本が同じ同盟に入っていたことは言うまでもありませんが、敗戦直後、共産党や社会党など左派の影響力が相対的に強かった点は共通しています。また左派の影響下にあつて、文化運動が盛んであつた点も共通しています。イタリアでは、レジスタンス精神がもっとも燃えていた1943年から1948年あたりにかけてネオリアリズムが流行し、当時ネオリアリズムにもとづく映画や小説などが数多く制作されています。ネオレアリズモ映画について見ておくと、1943年に出たヴィスコンティ監督の『郵

コメント2：『希望』^{エスボワール}『われらの詩』と山代巴（キアラ・コマストリ）

便配達は二度ベルを鳴らす』は、最初のネオレアリズモ映画とされ、以後ネオレアリズモ映画が次々と撮影されていきます。もっともすぐれたものとして、ロッセリーニの『無防備都市』や『戦火のかなた』、デ・サンティスの『荒野の抱擁』、ザヴァッティニ脚本＝デ・シーカ監督のコンビによる『靴みがき』や『自転車泥棒』、ヴィスコンティの『揺れる大地』などがあげられます。これらの映画はすべて、1949年までに撮影され、50年代以降、イタリアの経済的繁栄や社会状況の変化につれ、前述したようにネオレアリズモの活力は衰えて行きます。

もう一つイタリアと日本との共通点として挙げられるのは、戦後の政治体制や経済復興のあり方、両国のアメリカとの関係です。たとえば48年から実施されたマーシャル・プランと日本の占領政策の転換には、同じような意図が背景としてありました。すなわち、イタリアや日本を反共の防波堤とするというアメリカの方針です。アメリカの介入のもとで左派的な文化運動が下火になっていき、共産党が急速に国民大衆の支持を失っていく一方で、共産党の指導者たちの中にも混乱と分裂がきざして行きます。

ただしこれらの共通点に対し、イタリアにはレジスタンスの経験があったこと、ローマ・カトリック教会が保守的な立場から（特に反共産主義プロパガンダにおいて）大きな影響力を及ぼしたこと、またヨーロッパでは朝鮮戦争のような熱戦が起こらなかったことなど、イタリアと日本の戦後状況には大きな違いもありました。グローバルな冷戦構造のもとでの文化運動のあり方について考える際、このような重なり合いと差異をどのように考えたらいいいのか、という問題を、報告者のお二人に対してだけでなく、この議論の場に対して、提起したいと思います。

参考文献

原爆被害者の手記編纂委員会編『原爆に生きて』三一書房、1953年

山代巴『岩でできた列島』径書房、1990年

——編『この世界の片隅で』岩波書店、1965年

ノルベルト・ボッピーオ『イタリア・イデオロギー』（馬場康雄・押場靖志訳）未来社、1993年

色川大吉編『敗戦から何を学んだか—1945年 日本・ドイツ・イタリア』小学館、1995年

（キアラ コマストリ 大阪大学大学院文学研究科修士課程）